



27 苦船に寿老人 一点

大正期(二十世紀)

彫金

総一六・六×四四・五×一〇・一

白鹿や鶴亀をとまない、杖を手にして立ち姿あるいは座した姿で描かれることが多い寿老人が、ここでは、一人のどかに船遊びするという珍しい姿で表された作品。巻物が結え付けられた杖を傍らに置き、団扇をゆったりとあおぎながら空を眺める、柔らかな表情にとらえられている。世俗を超えた清らかな存在である文人への憧れが、この寿老人の姿に写されている。寿老人の部分は臙銀に金象嵌で、船は銅鑄製、屋根の部分は網代に細かく彫刻が施されている。船の部分に「北総松戸於岩瀬山春涛刻」と刻銘があるが、作者等については不詳である。大正十三年大正天皇および貞明皇后から秩父宮雅仁親王が拝領された品。秩父宮家旧蔵品。



No.27の部分



28 寿老人 一点

大正四年(一九一五)頃  
彫金 総高三二・六

人の寿命が書き込まれているという巻物が結びつけられた靈芝形の杖をつき、左手に亀を乗せた寿老人の置物。当初は鶴も添えられていたことが箱書などから知られるが、現存していない。朧銀の素地に、衣紋などが細かく象嵌されている。この寿老人の容姿は、長頭で豊かな髭をたくわえた背の低い老人の姿に表されており、どちらかという七福神のなかの福祿寿の姿に近い。本来は、寿老人と福祿寿は同一人物。中国で二通りに描き分けられた寿老人の姿を日本では別の人物と解釈して、福祿寿の名前で七福神に加えた。福祿寿は、道教の理想とされる福、祿、寿の三徳からつけられた名称である。

本作の作者については、底裏に「寿山」の象嵌銘があるが、不詳。大正四年の大札に際して大正天皇および貞明皇后から雍仁親王が拝領された品である。秩父宮家旧蔵品。